

## 黒森学校における師匠についての研究

渋川良夫 西目屋村立西目屋小学校

### 要 旨

黒石市に存在した黒森学校の師匠である僧侶の果たした役割を考察するため、黒森学校に関する文献や聞き取り調査を行った。黒森学校の師匠について明らかになったことは、初代の山崎是空は、墓石等の調査から浄仙庵を築くとともに寺子屋の礎を築いた。二代目の丹羽寂導は、是空の意志を受け継ぎながら、青少年の育成に専心した。寂導は、寂導彫りの技法で多数の仏像を彫っており、弘前市内の寺院にも現存している。仏像の技法は優しい表情が魅力的な面を持っていると評価されている。

黒森学校は、南津軽郡や黒石地方の政治、経済、文化の面で活躍した多くの人材を輩出した。学制以後も、私立学校として地域のために貢献したことや青森県外からも寺子を受け入れ、当時としては開かれた学校を目指していた。学校運営については、学校と保護者が連携を十分に図る等、今日の教育に通じることもあり、その歴史的な意義も大きい。

昭和の初め浄仙寺は焼失し、黒森学校に関する多くの資料を失ったが、平尾魯仙が記した古文書を調べることや津軽地方に現存する仏像を調査することが、黒森学校の実像をより明らかにするための今後の課題である。

【キーワード】 寺子屋教育 黒森学校 僧侶 浄仙寺 寂導彫り

### 1 はじめに

青森県における寺子屋教育の全盛<sup>1)</sup>は、天保年間(1830~43)から慶応年間(1865~68)であった。黒石市に存在したといわれている黒森学校は、当時としては交通が不便な場所にあり学校を設立するには良い条件ではなかったが、多いときには100名以上も学んでいた。独特の教授の仕方やその学校運営の仕方にも特色があり、県外からも訪れる人もいた。

全国の様子については、日本教育史資料<sup>2)</sup>を見ると身分別の経営欄がある。それによると師匠の身分は多彩で僧、神官、修験者、浪人、武士、農業、工業、商業、医師、平民などがある。身分と職業が混在した形になっているが、武士が多いのは、熊本、青森、山口、宮城等。農民が多いのは栃木、千葉、長野。商業は富山がで圧倒的に多い。医者は高知、広島、静岡。修験者が多いのは、宮城、秋田、群馬、山梨など東北地方が目立っている。神官が多いのは、山梨、島根、新潟、静岡など。僧侶は、福井、三重、静岡、滋賀などとなっている。地区の風土と師匠が誰であったかはかわりがあると思われる。

黒石市の寺子屋についてみると、当時の寺子屋数は23となっており、師匠の内訳は、武士9、神官5、医者3、平民4、僧侶2となっている。僧侶が師匠である寺子屋は、黒石市の浅瀬石の長寿院の寺子屋と黒森学校である。浅瀬石の長寿院は後に浅瀬石小学校設立とともに吸収されたが、黒森学校は私立学校として長く存在することになる。黒石市に

おいては、寺子屋の師匠が僧侶であるのが少ない。

ここでは、黒石市における寺子屋の師匠の違いを調べたり、黒森学校に貢献した僧侶について記念碑等で調べることを通して、山崎是空（以下是空）、丹羽寂導（以下寂導）を中心に寺子屋教育における僧侶の果たした役割について考察する。

## 2 先行研究

寺子屋の師匠についての先行研究について調べると、徳島県の稲飯幸生<sup>註1)</sup>の「寺子屋の師匠」と愛知県総合教育センターの浅井厚視<sup>註2)</sup>の「寺子屋師匠の教育力」がある。稲飯の研究は、寺子屋の師匠の世襲の様子について、浅井は師匠のために造ったといわれている筆子塚の記念碑を中心に調べたものである。

### 2-1 稲飯幸生の研究

寺子屋における師匠の役割については、稲飯幸生の研究がある。稲飯は徳島県藍住町における寺子屋の師匠について調べている。この調査では、寺子屋の師匠が同じ家で何代も継続されているとともに、単に読み書きだけではなく、躰や常識についても指導したということがわかっている。また、何代にも亘って寺子屋を継続したのは、三沢家や小倉家であり、この両家の寺子屋は明治5年の学制頒布により閉鎖することになったが、両家ともに寺子屋を中心に、私立徳命小学校（小倉家塾）、私立奥野小学校（三沢家塾）を開校した。この2校は明治14年（1881）に阿波国板野郡公立養徳小学校となり、現在の藍住南小学校となっている。

このことから、1つの寺子屋が同じ家で何代にも亘って寺子屋を継続しているのは、師匠が医者という点で、黒森学校の師匠が僧侶という点で違っているが、何代かに亘って寺子屋が続いている点が共通している。

### 2-2 浅井厚視の研究

浅井厚視は、寺子屋の師匠の教育力を考察している。愛知県の尾張南西部にある津島市、愛西市、弥富市、海部郡の寺子屋に関する古文書と筆子塚を通して、寺子屋についての調査を行っている。筆子塚では、江戸時代から明治の初めにかけて、教えを受けた門人たちは、亡くなった師匠のために筆子塚といわれる記念碑を建立した。教えを受けた子どもたちが、教師や学校のために記念碑を建立したという話は、今日ではあまり聞くことがない。

「師弟は三世の契り」と寺子屋ではいわれていたが、浅井の研究は、子どもと教師、教師と保護者、学校と地域との距離を縮めるための示唆を与えている。

## 3 研究の目的

本研究は、黒石市に存在した黒森学校における僧侶の果たした役割の歴史的な意義を考察する。

## 4 研究方法

研究にあたっては、黒森学校に関する文献を調査したり、僧侶について調べることを通しながら研究を進めていく。

## 5 黒石市における寺子屋教育の師匠

黒石には幕末から明治にかけていくつかの寺子屋があり明治6年に小学校令が布かれてからも、なお継続するものもあった。<sup>3)</sup>

小野川寺子屋は、前町坂ノ上にあつた。師匠は、小野川速瀬という神官であつた。主に町家の子弟を養成し女子の数は他より常に多かつた。当時は、男子100名、女子30名位であつた。盛寺子屋は、上町の南上方にあつた。師匠盛佐一郎は、町医者盛端策の次男である。門弟は10名前後の新しい寺子屋である。

山内寺子屋は、前町坂ノ上にあつた。師匠山内對馬は、坂ノ上住吉宮の神職であつた。門弟は40名内外、對馬は後に小湊に移住した。藤本寺子屋は、濱町にあつた。身分的には平民であるが、師匠は書をよくおこない黒石藩家の手本書きもした。

佐藤寺子屋は、大工町下ノ坂の上にあつた。師匠は、八幡宮の神職である、当時門弟は60名前後である。易経を教えたりするなど、神職として独特の寺子屋の経営を行っていた。

尾坂寺子屋は、師匠尾坂徳彌は黒石藩の役員であり、明治初年に二等銃等兵であつた。門弟は10名前後であつた。当時、各寺子屋の門生達は己が師匠の名を光らし他の寺子屋との知恵比べを行ったりした。

黒石では、寺子屋の師匠は圧倒的に武士が多いのが特徴と見られるが、黒石藩とも関係があるとともに政治とも関係している。

## 6 黒森学校の師匠

黒森学校では、僧侶が師匠であり、教え方もそれぞれ特徴があつた。特に、浄仙寺を開いた山崎是空とその弟子丹羽寂導は黒森学校の礎を築いたともいえる。2名の師匠について概観をしていく。

筆子塚と同じように、墓石や遺品等から当時の様子を知ることが可能である。ここでは、黒森山の浄仙寺にある、墓石や遺品等について調べ考察する。

**写真1**は、黒森学校の初代の師匠の山崎是空と2代目の丹羽寂導と位牌である。

火災のために昭和19年に焼失したが、平成に入り復元された。是空と寂導は血はつながっていないが、師匠と弟子という繋がり強いものであつた。

黒森学校の様子については、黒石市史だけではなく、周辺市町村の記録にも残っている。田舎館村史<sup>4)</sup>には、「田舎館村では藩政時代に豊蒔の一戸紋右衛門、諏訪堂の鹿内真司らが有名であり、維新から学制頒布の頃は、在宅士族の垂柳の伴忠三郎、高田の山田司、畑中の山口五右衛門、さらに社寺関係の田舎館の岩瀧生実、大根千の村上千成などの寺子屋があつた。さらに黒森山浄仙寺の山崎是空・丹羽寂導の黒森学校へ赴くものもあつた。」と記されているが、近くの村からも黒森学校へ進んでいることがわかる。

また、浪岡町史（現青森市）<sup>5)</sup>にも、黒森学校のことが記述されている。

文政7年（1824）山崎是空によって開かれ、近在の子弟を集めて法話を説き、地面に文字を書いて教えたという。そして、明治の世と



写真1 是空と寂導



写真2 浄仙寺境内

なり小学校教育として再発足するなどいろいろな変遷を経て、明治から大正にかけて南黒地方で活躍した多くの著名人を輩出したのである。その中から浪岡関係をあげると次のようである。女鹿沢村の成田治（女鹿沢小学校長、女鹿沢村産業組合長、女鹿沢村助役、郡会議員、女鹿沢村長）、野沢村柳沢の田中源五郎（郡会議員）、女鹿沢村松枝の石岡兵左衛門（女鹿沢村村議会議員、郡会議員、女鹿沢村長）、大杉村杉沢の石村正義（大杉村長、区長、東北電力浪岡変電所所長）などと黒森学校で学んだものも多いことがわかる。

この他に、青森県教育史によると、本間孫吉（大浦村助役、青森市役所書記）、宇野海外（黒石市、弘前中学校、米国へ留学）、小川元岩手県副知事等県外に出て活躍をした人も多いといわれている。

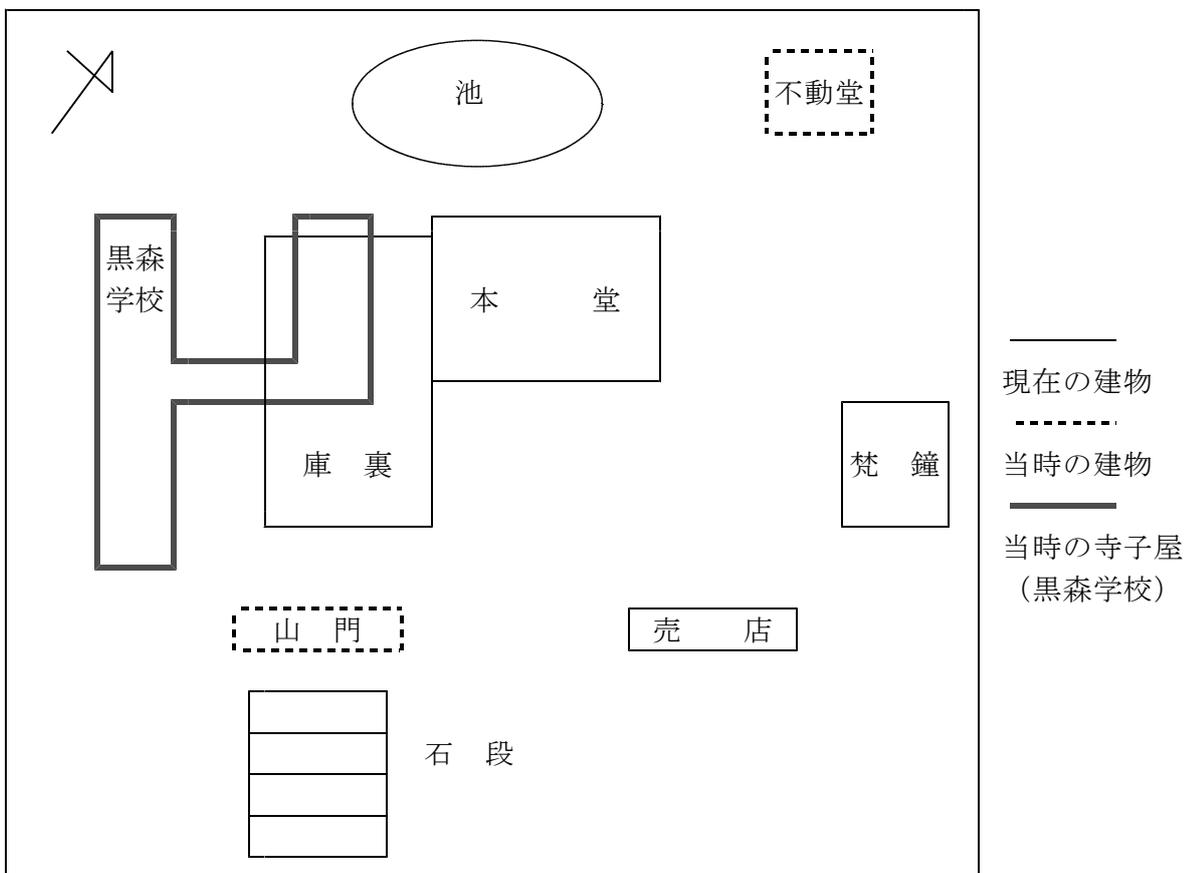


図1 浄仙寺境内図

**写真2**は現在の浄仙寺である。現在の平野義観住職によると、境内の敷石や山門の階段等は黒森学校ができたころに、下の町から山まで運ばれたということである。**図1**から黒森学校は、現在の庫裏の辺りにあったと尾上文化誌第9号に記述されている。

山門や不動堂等は、当時のままで現在残っている。本堂や庫裏は昭和の初めに焼失し、再建されている。梵鐘は、平成になってから建立されたものであるが、有名な観光地でもあるため売店等もある。浄仙寺境内には、秋田雨雀、丹羽洋岳等の文学碑もたくさん存在しており文学碑を見るためたくさんの観光客が訪れている。

### 6-1 山崎是空(やまざきぜくう)

浄仙寺を切り開いた人である。黒石の鍛冶屋山崎九兵衛の長男に生まれ、幼い時の名前を銀蔵といった。幼時より僧侶のまねを好み、出家を願った。25歳で菩提寺の来迎寺の良諦教存について、蓮光是空と号した。雑務が多く、望む修行が困難であるため翌年寺を辞し、中野の不動堂に参籠、夢告に従い黒森山の湧き水近くに草庵を結んで念仏三昧の生活に入る。粗食、時には断食という苦行の日々を送るうち、翌年には14歳年下の寂導が来山、その強固な意志を知って入門を許可した。その後は、若い子弟の協力で、修行と周辺環境整備が進められた。<sup>6) 7) 8)</sup>



写真3 黒森山の是空の墓

是空は自らの求道と、近隣から集まった青少年の育成に専心、身体も強健であったが、さらに強靱な精神力で仏道に励んだ。是空は比叡山の西塔、黒谷の聖人と仰がれた浄土宗の開祖、法然上人を誰よりも崇拝しており、法然の最晩年の言葉「只一かうに念仏すべし」(一枚起請文)を、そのまま地でいったものであった。浄仙寺開基以来、1876年5月、78歳で入滅するまでの50年あまり、ただの一度も黒森山を下りることはなかった。名越派本山専稱寺(いわき市)から諡号を受けた。写真3は、黒森山の是空の墓である。この場所に最初に草庵を作り、修行に励んだといわれている。

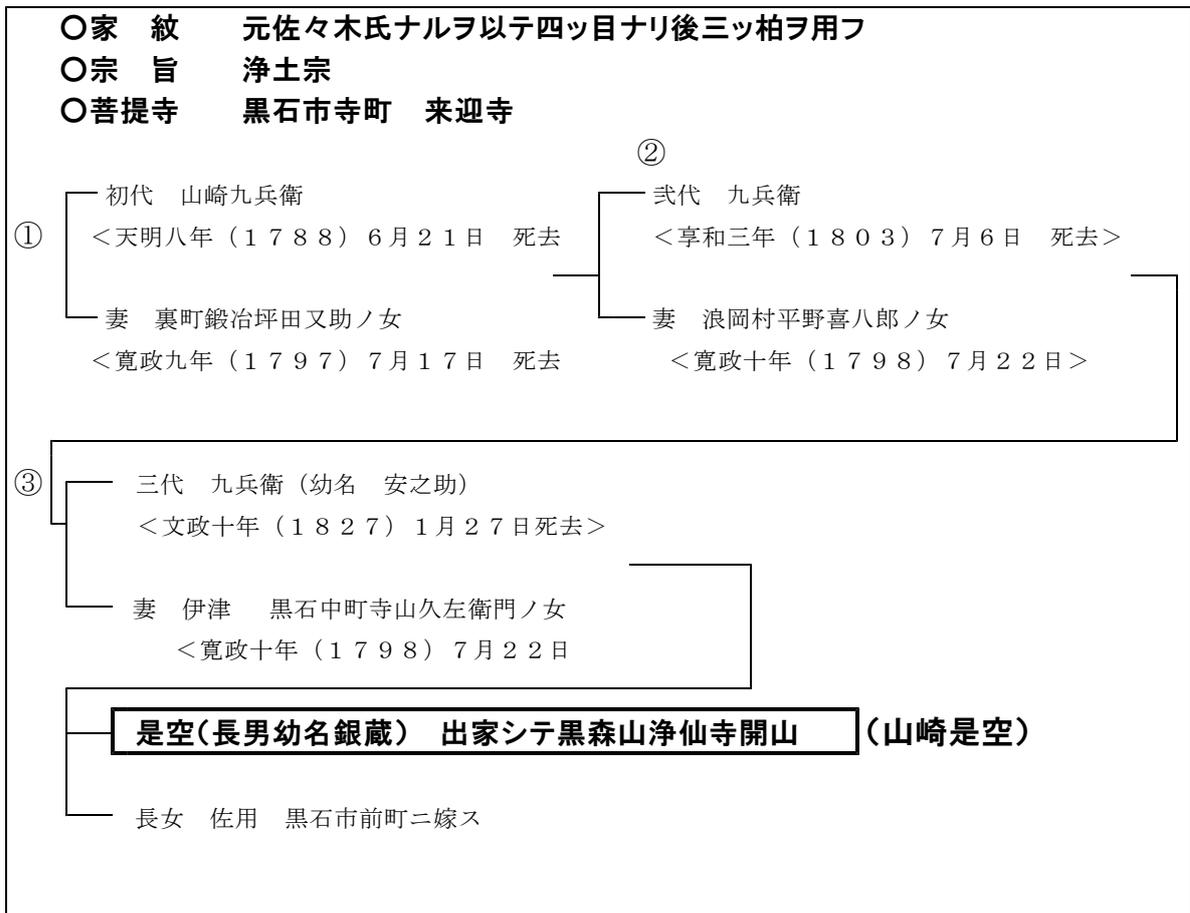


図2 山崎家系譜

図2は山崎家の系譜図の一部である。この図には省略して書かれていないが、五代目から尾上町（現平川市）に移転している。それまでは、黒石の鍛冶町に住んでいて、鍛冶を業としていた。是空は、三代目九兵衛の長男として生まれている。兄弟は、2人で妹がおり黒石に嫁いでいる。<sup>9)</sup>

## 6-2 丹羽寂導(にわじゃくどう)

黒石市板留の丹羽九兵衛の三男である。13歳で母と共に黒森山に参詣したが帰ろうとせずに再三の説得にも応じないため親族が協議、黒森山に結んで念仏三昧の生活を送っていた是空に入門させた。

寂導は是空を慕い、その実践に随従した。境内の桶水での沐浴を極寒の日に欠かさず、米、塩を断ち野菜の水煮や粟の粥などの粗食に甘んじ、粟がなくなれば

何日も食べないことも何度かあった。強固な信念に基づく求道の日々を重ねた師弟ではあるが、山を訪れる人々に対しては常に穏健であった。

修行の間に庵の周辺に木を植え池を掘り、近隣の協力を得て畑を開墾するなど、環境の整備にも尽力した。師弟の評判が高まるにつれて教えを乞う青少年が多くその教育にも力を注いだ。寺子屋は、後に黒森学校と称され、形を変えつつ大正2年（1913）まで続き、最盛期には100人以上が在籍、中には秋田県からも来ていたといわれている。

寂導は生来彫刻の才能があり一刀彫りの仏像を多数制作した。作品は黒石付近旧家などに現存し、「寂導彫り」と呼ばれている。（写真5、6）

是空隠居のあとを受けて浄仙庵住職となった寂導は、明治6年に隠居をしている。前年に「浄仙寺」の寺号が許可され、学制が布かれるなど明治新政府の法律的諸問題から役所との接触が避けられず、山を下りない誓願を立てていた寂導は、嘉永6年（1853）に8歳で入門していた寂静に世俗の手続きを委ね、自行と徒弟の養育に専心した。

寂導のことは浄土宗内にも響き、大本山増上寺法主の山下現有は「黒森隠遁遮世塵浄仙修道八十春 護禅学恵尊持成 今日宗門第一人」の詩文で讃えた。

名越派本山専稱寺（いわき市）から「接蓮社良引上人寂導行者」の諡号を受けている。寂導の出家にあたって立派な僧侶になるようにとの願いから、母親が黒森山の麓の中野の不動堂（中野神社）に21夜の参詣をしたとの逸話が残っているが、期待に違わぬ稀にみる高潔な僧としてその生涯を全うした。

浄仙寺の平野義観住職によると、寂導彫りは県内の各地にあるということである。境内にも20体程があるが、仏様、観音様、不動様等様々である。材質は、楠木やくぬぎ、栗の木等であり、名前が必ず彫られている。



写真4 寂導の墓石(正面)



写真5 寂導彫り



写真6 寂導彫り

弘前市内にも寂導が彫った仏像も多い。寂導の仏像も多い。寂導の仏像は技法的には民間仏の域を出ないが、その作為のない優しい表情が魅力的で今後もっとも評価されてよいと「弘前の仏像」の中で記されている。弘前の寺院に残っている寂導作の仏像は表1である。<sup>10)</sup> これを見ると、26の仏像が寺院に存在している。浄土宗が多いが、曹洞宗や真言宗の寺院にも寂導の仏像が見られる。調べると、津軽一円の寺院に数多くの仏像が存在している可能性がある。

表1 寂導の仏像

寺院名	宗派	名称	寺院名	宗派	名称
貞昌寺	浄土宗	善導大師座像	大仏院	曹洞宗	僧形立像
〃	〃	法然上人座像	最勝院	真言宗	狛犬(1対)
〃	〃	善導大師座像	〃	〃	大黒天立像
〃	〃	法然大師座像	〃	〃	恵比寿像
誓願寺	浄土宗	観音菩薩跪座像	〃	〃	不動明王座像
〃	〃	勢至菩薩跪座像	〃	〃	不道明王立像
〃	〃	不動明王座像	便心寺	曹洞宗	菩薩座像
〃	〃	法然上人座像	高福寺	曹洞宗	観音菩薩立像
〃	〃	善導大師座像	専修寺	浄土宗	善導大師座像
徳増寺	浄土宗	善導大師座像	〃	〃	法然上人座像
〃	〃	法然上人座像	〃	〃	女神座像
宝積院	曹洞宗	文殊菩薩座像	弘前市立博物館		阿弥陀如来座像
〃	〃	普賢菩薩座像	〃		千手観音立像

## 7 考察

黒森学校の当時の様子については、黒石市史ばかりではなく周辺の町村である田舎館村史や浪岡町史にも当時の様子が記され、当時の寺子屋教育が行われていたことが分かる。

黒森学校は、今の境内の庫裏のあたりにあったといわれている。当時としては、建物など十分な施設ではなかったと思われるが、地域の人達の協力があったことは学校に対する期待が大きかったことがわかる。日本教育史資料8によると、黒森学校の学習の程度は比較的高かったことがわかり、人間的な修練に重点が置かれていた。学校は、文政末年から大正初年まで80数年間継続していたと思われる。また、寄宿制も取り入れていて子弟の関係は深いことがわかる。

師匠については、墓石や遺品などから調べることができた。初代の山崎是空は苦行の末に黒森学校の基礎を築いた。青年に法話を説き、地面に字を書いて教えた。その熱心さは、地域に伝わり寺子の数も増えている。二代目の丹羽寂導は、黒石市の板留から養子として黒森学校を受けついでいる。最盛期には、100人以上が在籍していたともいわれている。

寂導は寂導彫りの技法で仏像を彫っている。弘前市内の寺院にも数多く残っていて、26の仏像が存在する。法然上人や善導大師等で、彫り方は、作為のない優しい表情が魅力的で今後評価されてもよいものばかりである。

黒森学校は、僧侶が師匠であり養子として後継者を招聘しながらも、学校が維持されている、学制の後でも私立の小学校として存続を図り、青森県内外から寺子を入れていた。これは、師匠である山崎是空、2代目の丹羽寂導の功績に負うところが大きい。

明治から大正にかけて、南津軽郡や黒石地方の政治、経済、文教面で活躍した多くの人物を黒森学校は輩出した。師匠が僧侶で、異色ではあるが開かれた寺子屋教育を行っている。現代にも通じることもあり、歴史的に見ても黒森学校の存在の意義は大きい。

## 8 まとめと今後の課題

寺子屋の師匠は手習いを基にして、躰や徳目の育成等全人的な教育を行っていた。教える内容は、書であっても躰と一体化した形で進められていた。師弟は三世の契り師匠と寺子は一生涯にわたるつながりを大切にしていたように思われる。手紙をとおしたりしながら消息の連絡をしていたようである。師匠は保護者や地域の人たちの力を借りて指導をした。地域と協力した教育が行われるととみに施設・設備についても有志の協力が不可欠であったようである。

寺子屋と現代の教育を同じ次元で考えることはできないが、現在の教育を江戸時代から見直すと、寺子屋の師匠と子ども・師匠と保護者の距離はきわめて適切な距離を保っていたように思われる。師匠達は修身などを含めながら、知の伝達を行い、聖職者として子どもや保護者に敬愛され、村の相談役として任務をはたしていたようである。

黒森学校については、平尾魯仙<sup>註3)</sup>が黒森学校について記した古文書が存在しているとともに、「一二以呂波和讚」(1830)の古文書もある。これらを調べるのが今後の課題ともいえる。また、津軽地方の寺院に存在する寂導の仏像についても調査することが黒森学校の当時の様子を知ることができることになるように思われる。

### <註>

- 1) 徳島県神山文化財保護審議会長、「寺子屋とその師匠」, 阿波学会紀要第52号(2006), PP121-124.
- 2) 愛知県総合教育センター, 「寺子屋師匠の教育力～愛知県海部地区の筆子塚の調査を通して～」(2009), 愛知県総合教育センター研究紀要第99集.
- 3) 1808-1880(江戸後期～明治), 弘前市出身, 画家、国学者.

### <引用文献>

- 1) 青森県教育史編集委員会(1970), 「青森県教育史 第1巻 記述編」, 青森県教育委員会, PP258-261.
- 2) 文部大臣官房報告課(1892), 「日本教育史資料8」, 文部大臣官房報告課, PP701-702.
- 3) 黒石市史編集委員会(1987), 「黒石市史」, 黒石市役所, PP335-336.
- 4) 田舎館村史編集委員会(1997), 「田舎館村誌上巻」, 田舎館村, P360.
- 5) 浪岡町史編纂委員会(2005), 「浪岡町史第三巻」, 浪岡町町史編集委員会, PP
- 6) 村上真完(1990), 「津軽の残照」, じゅうがつ社, PP100.
- 7) 稲葉克夫(1991), 「黒石人物伝」, 黒石市教育委員会, PP34-44
- 8) 佐々木高雄(2002), 「青森県人名事典」, 東奥日報社, PP535-707
- 9) 尾上町文化誌編集委員会(1990), 「尾上町文化誌第九号」, 尾上町教育委員会, PP96-114.
- 10) 「新編弘前市史」編集委員会(1998), 「弘前の仏像」, 弘前市市長公室企画課, PP47-235.

### <参考文献>

- ・前野喜代治(1958), 「みちのく双書青森県教育史上」, 青森県文化保存協会, PP101.
- ・青森県高等学校地方史研究会(2007), 「青森県の歴史散歩」, 山川出版社, PP84.
- ・青森県文化財保護協会(1983), 「新撰陸奥国誌第2巻」, 図書刊行会, PP55.
- ・佐藤雨山(1973), 「黒石地方史」, 福士書店, PP201-205.
- ・角川春樹(1985), 「角川日本地名大辞典」, 角川書店, P1039.
- ・鈴木 廣(2008), 「青森県文学探訪」, 北の街社, PP263-270.
- ・長谷川成一(2004), 「弘前藩」, 吉川弘文館, PP161-164.

※文中の写真は黒森山浄仙寺平野義観住職の許可を得ました。